

# 「親が怖くて指導できず」底辺校教師の悲痛な叫び

## 東海地方で30年働く先生が語った事（第4回）

濱井 正吾：教育系ライター

2024年05月23日



教育困難校では先生の働き方も変化しているようです。※写真はイメージ（写真： show999 / PIXTA）

学力が低く、授業についていくことができない「教育困難」を抱える生徒たちを考える本連載。今回お話を伺った鈴木先生（仮名）は、東海地域で30年以上高校教員として働くベテラン教師です。鈴木先生の高校は、偏差値40以下の私立高校であり、昔も今も「教育困難な生徒」＝「勉強がなかなかできない生徒」が多く通っています。

そんな先生目から見ると、昔よりも現在のほうが、さまざまな意味で「深刻な」問題を抱える生徒が多くなっているのだそうです。自身も15年前に「教育困難」校を卒業した濱井正吾氏が教育困難校の先生の働き方の変化について話をうかがいました。

### 教育困難校の働き方も変化

昨今、全国の教育現場で長時間労働が常態化し、過酷な労働環境であることが問題視されるようになった結果、文部科学省は「教員の働き方改革」を推進するようになりました。

その動きの中で、現在「教育困難校」の教員たちの働き方は、過去と比較して、どのように変化しているのでしょうか。



濱井正吾

この連載の一覧は[こちら](#)

東海地域で30年以上、偏差値40以下の「教育困難校」の高校教員を務めている鈴木先生に、1事例として、そうした疑問の数々を尋ねてみました。

鈴木先生は、30年以上の長い教員生活の中で、高校の教員の働き方も大きく変わってきたと言います。

「私が働く学校に限った話かもしれませんが、今は昔と比べて、労働環境はよくなったと思います。『教員の労働環境がブラックだ』というのが大きな問題になった結果として、労働時間自体は減っています。

例えば昔は休日に先生向けの研修会に行って、平日はずっと生徒の相手をしていました。夜遅くまで学校に残って、つきっきりで生徒対応をすることも少なくありませんでした。

それが、残業の規定が生まれたことで、休日朝から晩までの勤務や21時22時を過ぎてまでの残業も大きく減りました。ただ、それはうちの高校が一般企業と同じ給与ルールになり、残業も時給換算して上限まで払ってくれるようになって、働き方のバリエーションが増えたことが大きいと思います」

「多くの学校は今まで通りだと思うので、保護者対応や業務が増大していると思いますが」との前置きされたうえで、鈴木先生の学校では「労働環境自体は昔と比べてよくなった」と語ります。教員の働き方改革は、現場で一定の成果が出ているとも捉えられる一方で、それによって新たに生まれた問題についても教えてくださいました。

---

## 密なコミュニケーションが大きく減った

「私の高校では、生徒との密なコミュニケーションの頻度は大幅に減りました。ワークライフバランスなんて言いますが、昔はワークもライフも境目が曖昧だったんですよ。

昔は、家庭訪問に行き、そのまま生徒に『ちょっとラーメン食いにいこうぜ』と声をかけたりしました。それで、自分の行きたかったラーメン屋に連れてって、『美味しい！』と感しながら、生徒と色々な話をして、『じゃあ明日、学校で待ってるからな！絶対来いよ！』などと指導していました。

あの時間は、自分にとっては仕事の時間でもあるし、プライベートの時間でもあった。でも、今そんなことをやったら、『生徒を勝手に連れまわすな！』って怒られますよね」

おらかな時代だったからこそできた、立場を超えた人と人との交流も、規制が相次ぐ現代社会では、できなくなってしまったようです。

「最近ではコンプライアンスを意識しなければならないからこそ、指導に対して、今までとは全然違う神経を使わなければならなくなりました。たとえば今は、家庭訪問の際に家に子どもしかおらず、親がいないときには、家に入ってはいけないんです。それは不法侵入だと言われてしまいます。

また、学校で生徒と話をしているときでも、その生徒の後ろ側にいる親のことを考えてしまいます。『今この生徒にこんなことを言ったら、後からここだけ切り取られて、親からクレー

ムが来たりするんじゃないか』と思うと怖くなって、あまり強い言葉を使ったりすることができません」

生徒の心に一步踏み込んだ指導は、家庭の問題に介入することにもつながる場合があります。

年長者や社会的地位の高い人たちの言動によるハラスメントが噴出しはじめ、社会問題につながるリスクが高くなってきた現在においては、そうした「熱血指導」は、鈴木先生としてもなかなか難しいようです。鈴木先生個人としては、昔と今の働き方について、どう思われているかを尋ねてみました。

「昔はよかったと一概に言いたいわけではありません。でも、生徒と本気でぶつかるということが、今は圧倒的に減ってきていますね。昔は、赤裸々なところまで踏み込むから、どっちも裸になれる、という意識がありました。

うまくいなくて、『もう俺なんて死んでやるんだ!』と言ってくるような生徒がいて、それに対して『馬鹿なこと言うんじゃない!』と指導することは多かったですが、今はそんなことを言えるような間柄になるまでに至りません」

「決して体罰を肯定するわけではない」と前置きをされたうえで、先生はこう続けます。

「今では、生徒とぶつかることができる間柄になれないので、生徒の人生を大きく変えるようなこともなかなか言えませんよね。昔のほうが生徒も先生も喜怒哀楽を素直に表現していたのは事実です。それがなくなったというのは、生徒も先生もお互いに喜怒哀楽を表現する機会が減ったということにほかなりません」

---

## 喜怒哀楽を表現できない生徒たち

先生も生徒も感情を前面に出していた過去と比べると、現在ではそれを表に出すことができない子どもが増えたとも感じているようです。それは、コロナが到来したことも大きいようでした。

「私の高校の生徒を見ていると、喜怒哀楽を表現できない子どもたちが増えていると思います。昔よりも圧倒的に、喜怒哀楽を表現しない場合が多いのです。しかも、コロナを経たことでマスクを着けたままで会話することが多くなりましたからね。

相手の感情を読み取ることも、自分の表情を作って喜怒哀楽を表現することも、大きく機会が減りました。その要因も相まって、生徒たちは先生のことをあまり信頼できなくなっていると思いますし、先生も先生で、本当のことをなかなか生徒に言えなくなっていますよね」

鈴木先生は自身の高校の経験を通して、今の教育現場は言いたいことが言えない環境になってしまった、と感じているようです。その中で鈴木先生が、生徒に言ってあげたい本音とは何か、聞いてみたところ、切実な回答が返ってきました。

「私が勤めている学校は地域の“底辺校”と呼ばれる高校なわけですが、その生徒の親は、結構

な割合で、この高校の卒業生です。『自分は全然勉強もせずにこの学校に来て、なんとかなった。だから、自分の子どもも、この学校に入れておけばなんとかなるだろう』と考えている親も多い」

## 生徒の親自身の学びや意識も大切だ

「学校経営としてはそれでいいのかもしれませんが、本当は、生徒にその意味を考えてほしいんですよね。つまりは階層構造の固定化であり、格差の再生産が行われてしまっているんです。『君たちが親になる頃には、もうちょっと頑張って勉強して、ちゃんとした大学に行って、いい就職先に行って、子どもにちゃんと教育的な投資ができる余裕を持ってほしい。それで、君たちの子どもを、この学校に入れないようにしてほしい』って、目の前の生徒に対して言ってあげたいですよね。そんなことは、今は絶対に生徒に向かって直接は言えませんが」

昔は言えていた本音が、言えなくなってしまった。鈴木先生の高校の事例を聞いていると、格差の再生産を助長し、次の教育困難を生んでいる、という面があるのかもしれない。これは根深い問題として、今後も考えていく必要があると言えるでしょう。

# 東洋経済

TOYOKEIZAI  
ONLINE

### 東洋経済ID関連サービス

- The ORIENTAL ECONOMIST
- 東洋経済education × ICT
- 会社四季報オンライン
- シキホー！Mine

- 業界地図デジタル
- 東洋経済STORE
- 東洋経済デジタルコンテンツライブラリー
- 株式ウイークリー

### 法人向け関連サイト

- 法人向けデータサー
- 東洋経済広告
- 東洋経済プロモーシ

### 東洋経済新報社について

運営会社 | 採用情報 | 公式アカウント一覧

### 東洋経済オンラインについて

サービス紹介 | 広告掲載 | WEBサービスでの情報収集 | プライバシーポリシー | 知的財産 | 特定商取引法に基づく表示 | 東洋

---

Copyright©Toyo Keizai Inc.All Rights Reserved.